マンツーマンとゾーンはどう見分けるか？（２）

2025/6

JBA代表強化Gr.
育成テクニカル推進セクション
マンツーマン推進プロジェクト

JBA JAPAN BASKETBALL ASSOCIATION

多くみられる事象

①長身者が制限区域内にとどまり続ける事象

②オフェンスリバウンドの後のマッチアップがない

③マッチアップが不明確な状態から、トラップに行くケースがある

④トラップ専門とされている選手がいる

⑤完全にビジョンをなくす選手がいる

⑥フルコートでのスローイン時にスローインするプレーヤーへのマッチアップについて

⑦アイソレーションオフェンスの際のディフェンスの捉え方

⑧スクリーン時のスクリナーディフェンスの捉え方

⑨オフェンスからディフェンスの切り替わりにおけるマッチアップ

⑩本来マッチアップすべきものが違う（ガードはガード、ビッグはビッグというマッチアップ）

⑪かなり裏パスを狙う位置に来ており、トラップから出てくるパスを狙うインターセプターになる

＜スローインのケース＞

⑥フルコートでのスローイン時にスローインするプレーヤーへのマッチアップについて

→ スローインするプレーヤーにマッチアップできる場合、原則として適切なマッチアップを行うこと。（7-1-2）

→ 意図的に異なるポジションを取っており、かつトラップやインターセプトを計画しているとみなされる場合は旗の対応を行う。

→ マッチアップしていることがMCにわかるようにすること。（1-2-1）

→ スローインするプレーヤーに完全に背を向けてスローインするプレーヤーを視野に入れない場合は旗の対応を行う。

→ 意図的、組織的であるとMCが判断すれば警告を与える。
マッチアップを促すが、1.5m以内に必ず行ける場合ばかりではないので、
トラップを狙う、裏パスを狙うなどの意図がなければそのままプレーさせる。

＜スローインのケース＞

⑥フルコートでのスローイン時にスローインするプレーヤーへのマッチアップについて

エリアを意図的に守ったとMCがみなして、赤色旗が上がったケース

＜アイソレーションのケース＞

⑦アイソレーションオフェンスの際のディフェンスの捉え方

→ オフェンスが動かないのでディフェンスも動かず、ゾーンに見えるがマッチアップをしている状態

→ オフェンス側が引き起こしている事象であると考える。（判定基準Ⅶ）

＜スクリーン時のボールマン、スクリナーディフェンス＞

⑧スクリーン時のスクリナーディフェンスの捉え方

→ スクリーン後のマッチアップ状況を見る必要がある（1-3-3）

→ 長身者が制限区域内にとどまり続けるような事象であれば改善を促す。

＜マークする相手を変えること＞

⑨オフェンスからディフェンスの切り替わりにおけるマッチアップ
⑩本来マッチアップすべきものが違う（ガードはガード、ビッグはビッグというマッチアップ）

→ 攻防の切り替わり時は必ずしもマッチアップすべき対象になるとは限らない（ガードはガード、ビッグはビッグ、というマッチアップ）、
チームが決める自由度を与えるべき（MCは管理できない）

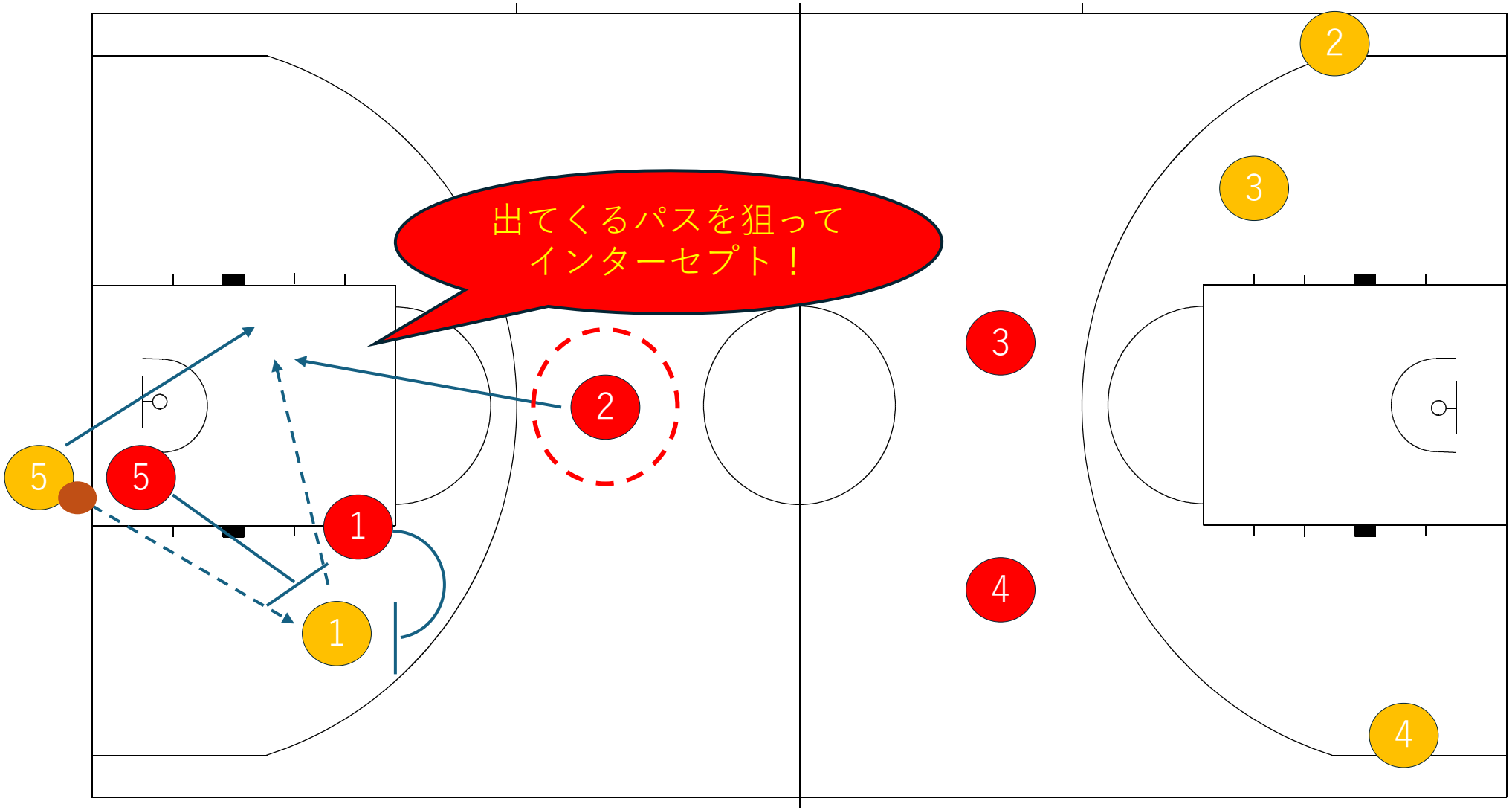
→ ビッグマンを外に出したいからオフェンスのマークマン（シュート力がないものを意図的にマッチアップする）がアウトサイドへ出るがついていかないのはどうなのか、についてはMCとしてコントロールするものではない。

→ マッチアップが異なるだろう、ということはMCがコントロールできない/ゾーンであるとはみなさないので、異なるマッチアップになっても旗の対象ではない。

→ ディフェンスのスタートが1－2－1－１のような位置どり（エリア）からスタートすることはゾーンプレスとみなす。（まえがき）

＜フルコートでの最も遠いプレーヤーのマッチアップ位置＞

⑪かなり裏パスを狙う位置に来ており、トラップから出てくるパスを狙うインターセプターになる



＜フルコートでの最も遠いプレーヤーのマッチアップ位置＞

⑪かなり裏パスを狙う位置に来ており、トラップから出てくるパスを狙うインターセプターになる

→ 「ボールマンになった時に戻ることができる、得点を防ぐことができる位置どりをすること」
（２線のポジショニングでの説明、基準規則では定義はされていない）

→ U12の場合「投げられない＝ボールが行かない」ので「マークマンをマッチアップしているふりをして」「トラップや裏パスを狙う」プレーを指示する指導者がいる

→ 距離を規定することは、常に変化する以上、数値を示すことは妥当ではないので行っていなかった。（2線がどこまでヘルプに寄って良いのか、と同じ議論と考える）

→ オフェンスが空いているノーマークを攻めることで解決するべきであるが、それができないレベルの攻防において指導者がそのプレーを狙わせることに問題がある。（3-3-6、まえがき、5-2-7）

→ **ボールマンになっても戻ることができない位置にいる時はあるべき姿に改善を促す。**

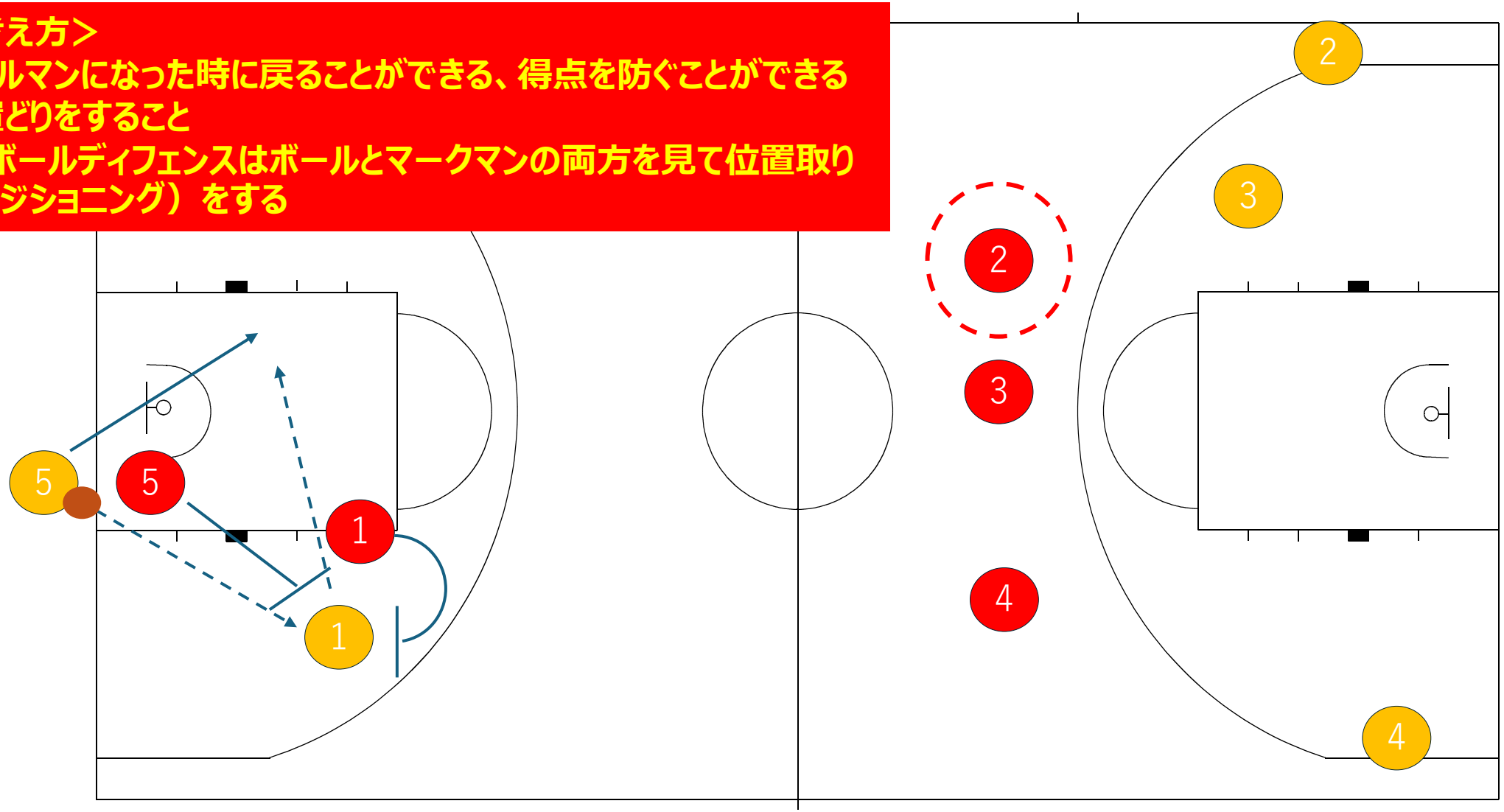
→ ボールが飛べば、マッチアップ違反として指摘できる。

→ 基準規則には追加せずに指導者に改善を求めるのが現状。理由は基準規則に記載するには難しくケースによるから。効果的である原因は、子供達がボールを投げられないことにあるが、U12世代で技術的にパスの距離を伸ばすといったオフェンス側の発達も求められる。

＜フルコートでの最も遠いプレーヤーのマッチアップ位置＞

2番のあるべきポジション例

＜考え方＞
ボールマンになった時に戻ることができる、得点を防ぐことができる位置どりをすること
オフボールディフェンスはボールとマークマンの両方を見て位置取り（ポジショニング）をする



トラップを仕掛け続けることが 育成年代であるべき姿かどうかは、

指導者の考え方

に関わる。

指導者が倫理観を持ってコーチングすることが大切で、

あまりにコントロールするルール作りで縛ることは
マンツーマン推進の方向性に逆行する。

「子どもたちがバスケットボールを楽しめる環境作り」

を再考し、

「バスケットボール本来の在り方に近づけること」

を目指したい

育成世代の取り組みについて

理解を深め、

日本のバスケットボールを

成長させましょう